

# スピッツは変わったか？ — アルバム『小さな生き物』(2013) をめぐって —

Has the Style of the “Spitz” Changed?  
— On the New Album in 2013 —

長 野 俊 樹

Toshiki NAGANO  
音楽教育講座

(平成26年9月30日受理)

## 1. 序論

本論文は、日本のポップ・ミュージック界の人気バンド、スピッツの14作目のオリジナル・アルバム『小さな生き物』を研究対象として採りあげる。筆者は、スピッツが2006年に発売したシングル・コレクション・アルバム『CYCLE HIT 1991-1997 Spitz Complete Single Collection』と『CYCLE HIT 1997-2005 Spitz Complete Single Collection』(この2点をまとめて『CYCLE HIT』と略記する)に収録された30曲に関する論文を2012年10月に書き上げ、2013年2月に発表した。今回の論文の目的は、その前回の結果とアルバム『小さな生き物』収録曲に見られる特徴との共通点と相違点を論じることにより、スピッツというバンドを時間的経過の中で観察する端緒とすることにある。

アルバム『小さな生き物』は2013年9月に発売された。収録曲は13曲であるが、第8曲《scat》は歌詞のない間奏曲的性格の楽曲であることから、これ以外の12曲を扱う。(このアルバムには、アルバムと同タイトルの楽曲が第2曲として収録されている。本稿ではアルバム・タイトルは『 』、楽曲は《 》で示している。)

日本のポップ・ミュージックとスピッツに関する先行研究については、先の論文で考えを述べたので、ここでは割愛する。

本稿では、スピッツに関する先の拙論と同様、楽曲の形式、調、和音、旋律音の運動の特性、音域という面に着目して論じる。また、旋律の全体

的な流れを俯瞰するため、これも同様にグラフを用いた。このグラフについては先の拙論で詳説したが、特殊なものなので、以下で簡略に説明しておく。

①スピッツの楽曲における旋律の音域をカバーするため、点なしイ音～2点ニ音の音域を設定する。②点なしイ音を1とし、異名同音は同じ音として、半音ごとに整数列を割り当てる。③1拍を単位とし、和声的・構造的に重要な音や旋律輪郭を把握するうえで欠かせない音を主要音として抽出し、②の整数列を当てはめる。④これを折れ線グラフにする。⑤形式区分をグラフに縦線で記入する。⑥主音と属音の位置を横線で記入する。

スピッツに関する先の拙論では歌詞については触れなかったが、本稿では分析の最後の節で簡単に触れておくことにする。

## 2. 分析

### 2.1. 形式

まず形式について記述する。ここでは、先行する拙論におけるのと同様、現代日本のポップ・ミュージック界における一般的慣例にしたがひ、AメロをA、BメロをB、サビをSと略記する。この区分の仕方とそれぞれの部分の音楽的な意味については、大角の研究(大角, 2000)に基づくが、ここでは繰り返さない。さらに、間奏的・エピソード的な部分をEとし、全体の終結部をK、一つの部分の終結的小部分をkと表記すること

にする。

『CYCLE HIT』では、対象の30曲中、ABS型に分類できるものが11、その変化形が6、AB型(もしくはAS型と言ってもよい)が5、その変化形が8だった(長野, 2013, p.4)。

今回のアルバムでは12曲中、ABS型とそのわずかな変化形が7ある。《小さな生き物》はいきなりサビから始まるSABSABSであるが、このタイプのいちばん典型的なパターンである。《野生のポルカ》はABSを繰り返す有節形式であり、最後に終結句Kが付く。これと似ているのが《ランプ》と《遠吠えシャッフル》である。詳しく書けば前者はABSBSA、後者はABSABSSAであるが、要約すればABSの骨格があって、最後に終結部としてのAが付いた形である。《オバビニア》もこの系列の変化形であり、ABSに終結部としてAが付く。ただしこの曲ではその終結部の前でSが二度歌われ、反復されたSは変形して主音に落ち着く。《さらさら》は終結としてのSの前にエピソードが挿入されるので、要約的にはABSESとなる。《エンドロールには早すぎる》はAとBの間につき部分Tが挿入されたATBSと見なすことができる。

他方、AB型に属すると考えられるのは4曲である。冒頭の《未来コオロギ》はABEBである。Eは性格的に弱く、サビ的であるのはむしろBである。《りありてい》は要約すればAABKと見なすことができる。これもBがサビに相当する。《潮騒ちゃん》はAABAを三度繰り返すが、リート形式におけるaabaの感じに近い。《きっと僕は旅に出る》はアルバム中もっとも複雑な構成を示す。Aには通常の楽節のほかに3小節半の締め括り句が付く。Bはサビと考えてよいが、半終止する前半と完全終止する後半からなり、かなり大規模である。ABが二度現れた後、中間部的な挿入部分Eとなり、続いてBの後半だけによる終結部がくる。反復を捨象して要約的に示すと、AkBEKである。

以上のABS型にもAB型にも属さないのが《スワン》である。これは主部—中間部—主部という三部形式である。

## 2.2. 楽曲の開始と終止

開始和音が主調のIでない現象は現代のポップ・ミュージックにおいて広く見られるが、『CYCLE HIT』ではあまり多くなかった。対象曲30のうち、主調のI以外の開始は8であるものの、そのうち6はサビから始まっているため

あり、これを除けば該当曲は2にすぎない。

アルバム『小さな生き物』では、開始和音が主調のIでない楽曲が5曲ある。このうち《遠吠えシャッフル》と《僕はきっと旅に出る》はV和音からの開始である。《未来コオロギ》、《さらさら》、《エンドロールには早すぎる》はいずれもvi和音からの開始であるが、これは後の節で詳しく触れる平行短調への傾斜などと関連がある。サビから開始するのは《小さな生き物》だけであるが、最初の和音はIである。

『CYCLE HIT』で歌の最終和音がIでないものは、フェイドアウトも含めて8曲を数えた。アルバム『小さな生き物』においてフェイドアウトするのは《エンドロールには早すぎる》だけであり、Sの最終回の終止だけがIではなくvi和音に変えられている。おそらくフェイドアウトへの導入のためだろう。《小さな生き物》では、歌詞のついたSの最後の旋律がふつうにIで終始した後、スキヤット「oh」によるわずか1小節強の旋律でviへ逃げる。これは特別な余韻の効果である。

《りありてい》、《さらさら》、《遠吠えシャッフル》の最終和音がIになっていない。これらのうち、《りありてい》と《さらさら》については後の節で詳しく論じる。

## 2.3. 調の選択

各曲それぞれの全体的・表面的な調選択を頻度順に見ると、『CYCLE HIT』では30曲中イ長調が6、ハ長調5、ヘ長調5、ト長調4、ニ長調3、ホ長調3、変イ長調と変ロ長調が1ずつだった。短調はホ短調と嬰ハ短調がそれぞれ1ずつ見られた。

『小さな生き物』では、ホ長調4、ト長調3、ハ長調2、イ長調2、ヘ長調1となっている。明白な短調はない。フラット系の調に対してシャープ系が圧倒的に優位であり、4分の3を占める。アルバムの第1曲と最終曲がともにハ長調であるのは、偶然であるのか意図されたものであるのかは不明である。

『CYCLE HIT』は15年間にわたる活動の集成であるから、『小さな生き物』と単純に比較することはできないが、シャープ系の優位は同様であり、選択頻度が上位の調どうしにも共通性が見られる。『CYCLE HIT』でホ長調とならび、3曲で選択されていたニ長調が、シャープ系であるにもかかわらず新アルバムで選択されていないことは、音域や音運動の特性と関連があるのではない

かと推測することもできる。つまり、ニ長調がホ長調へと吸収され、調選択の合理化・簡略化が起こった可能性があるのだが、もう少し調査対象を広げてみないと決定的なことは言えない。

## 2.4. 転調

ヨーロッパ音楽の伝統的な作曲の仕方から見て、はっきりと転調を示す旋律音や和音の動きが出てくるのは、《オパピニア》のBの末尾だけである。この曲はト長調であるが、歌詞が「つながったときには」の箇所、旋律がロー嬰ハニと進み、和音はEm<sub>7</sub>—A<sub>7</sub>—Dとなる。しかし、次の小節ですぐにト長調に戻る。

他方、2013年の拙論で指摘した（長野、2013, p.4）、主調以外の調の特徴や傾向を示す楽曲は多い。《未来コオロギ》はハ長調だが、A部分がAmコードから始まってイ短調的領域を示し、曲全体としてもAmコードが象徴的な響きになっている。《さらさら》はホ長調だが、嬰ハ短調的な傾向がかなり強い。これはA部分がC#mで開始すること、B部分では二つの楽節がともにG#m<sub>7</sub>で半終止すること、SとEでは楽節の終止がすべて旋律的には主音に到達しているものの、コードはC#mであることによる。しかし、それでもこの曲の主調が嬰ハ短調にならないのは、旋律の終止音としては嬰ハ音が一度も使われていないこと、経過的な和音としての限られた使用を除いてはG#<sub>7</sub>が出てこないこと、要所の和音やC#mのドミナント和音としてはつねにホ長調のドミナントであるBまたはB<sub>7</sub>が使われることによると考えられる。《スワン》もホ長調だが、主部の後半や中間部でC#mの影響力が強い。

こうした平行短調への揺れが顕著であることを筆者は前著で指摘したが（長野、2013, p.4）、このアルバムでも《小さな生き物》や《ランプ》などのB部分に同様の現象が見られる。《僕はきつと旅に出る》ではE部分の末尾で同主短調（ハ短調）の和音がいくつか使用されるが、これはごく一時的な借用にすぎない。

《エンドロールには早すぎる》ではii度短調への揺れが見られる。この楽曲全体はGmコードによって支配されており、ト短調の自然短音階への傾きを強く示している。しかし、最後の終止音はハ長調の主音であり、和音進行もC—Fという正規の完全終止形である。またト短調（自然短音階）をハ長調と区別する変ホ音は一度も出てこない。

## 2.5. 調と音階についての特別な問題

調や音階について、通りいっぺんの観察からは漏れがちな特別な現象について、追加的に指摘しておきたい。すでに前節において、《さらさら》や《エンドロールには早すぎる》に見られる調関係の揺れについては論じたので、これとは少し異なる《りありてい》を取りあげる。

《りありてい》は調号、最終和音がEであること、B—Eという正規のカデンツが要所で現れることなどから、とりあえずホ長調と見なすことに問題はない。しかしよく検討すると、最後に位置しているSの旋律の最終音は嬰ト音であり、主音には到達せず、この箇所の和音進行も正規の完全終止であるB<sub>7</sub>—Eではなく、F#m<sub>7</sub>—Eである。旋律的にはこの最終部分はイ—嬰トであり、嬰トは安定しており、その前のイは終止音への下行導音と言ってよい。他の部分AやBでも、最後は嬰ト音であり、主音ではない。主音であるホ音は全体を通じて半終止的な位置・意味では出てくるが、終止音にはならない。さらに嬰ニ音はホ長調では導音であるが、この楽曲では導音として機能していない。この曲の個性の一つは前奏部に現れ、A部分を基礎づけるコード進行E—D(on A)であり、ここに嬰ニは含まれない。このコードD(on A)とホ長調の本来のドミナント・コードBとの対立は、歌詞「(ゆっく)り注意深くさわれ」の箇所に象徴的に現れる。コード進行E—D(on A)はロック系などの音楽でしばしば耳にする典型的な響きであり、ヨーロッパの伝統とは異なる特別な音感覚を示している。

## 2.6. 旋律音の運動音域と主音・属音

先の拙論では、各曲の旋律音の運動を抽出したグラフに主音と属音を示す線を書き入れて比較検討し、三つのグループに分類した（長野、2013, p.5～6）。

①一つの楽曲の旋律全体がほぼ主音を基準としてその上下に広がるもの。これは『CYCLE HIT』では11曲あり、調ではハ長調5、ホ長調とホ短調3、ニ長調2、変ロ長調1だった。

②一つの楽曲の旋律全体がほぼ属音を基準としてその上下に広がるもの。『CYCLE HIT』では10曲、ハ長調5、ト長調3、イ長調1、ホ長調1だった。

③形式の区分ごとに音運動の基準が変化するもの。『CYCLE HIT』では6曲、イ長調3、ニ長調1、ト長調1、変イ長調1だった。

アルバム『小さな生き物』について、同様の検

討を加えると、以下の結果となる。

①は3曲、ハ長調の《未来コオロギ》(図1)と《僕はきっと旅に出る》、イ長調の《潮騒ちゃん》である。

②は2曲、ト長調の《野生のポルカ》(図2)

とホ長調の《スワン》である。

こうしたことから、『CYCLE HIT』と『小さな生き物』に共通の傾向の可能性を指摘することができる。まず基準音が主音である場合、『CYCLE HIT』で頻度が高い調はハ長調、ホ長調・ホ短調、

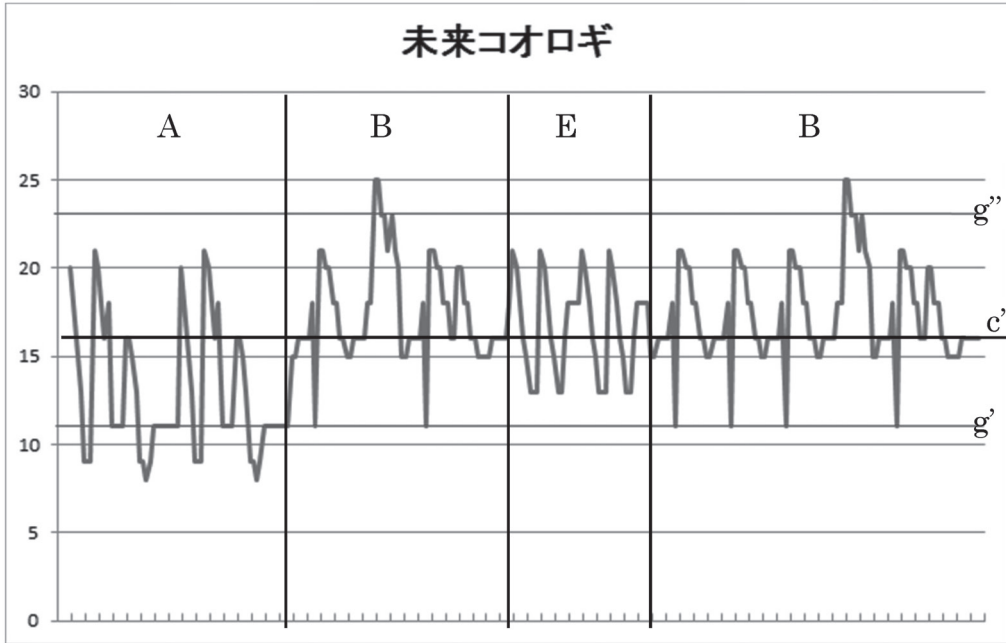
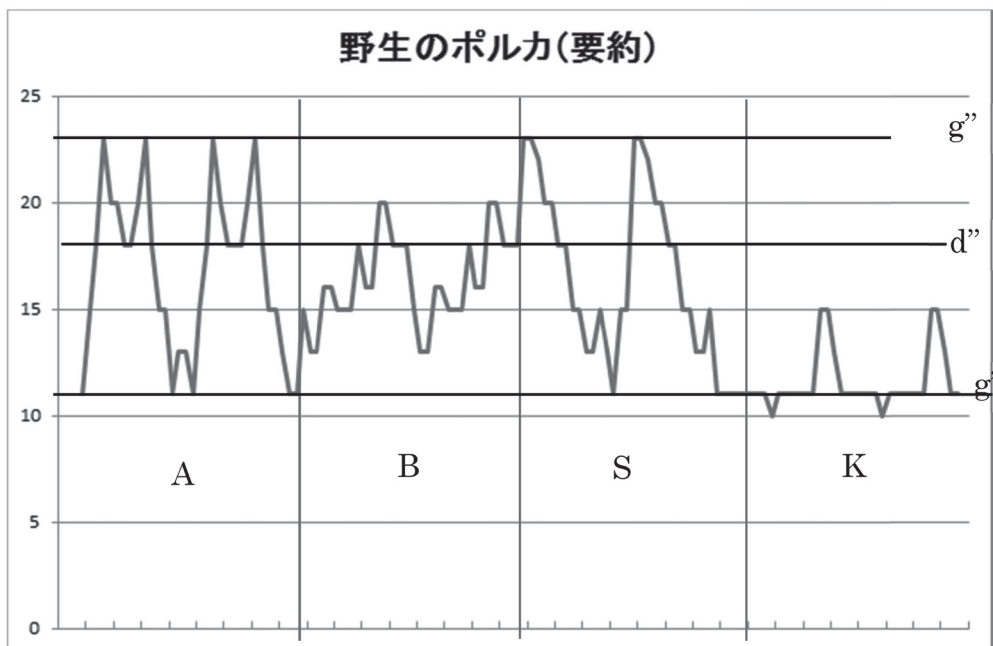


図1



「(要約)」とは反復をできるだけ捨象して表示していることを示す。

図2



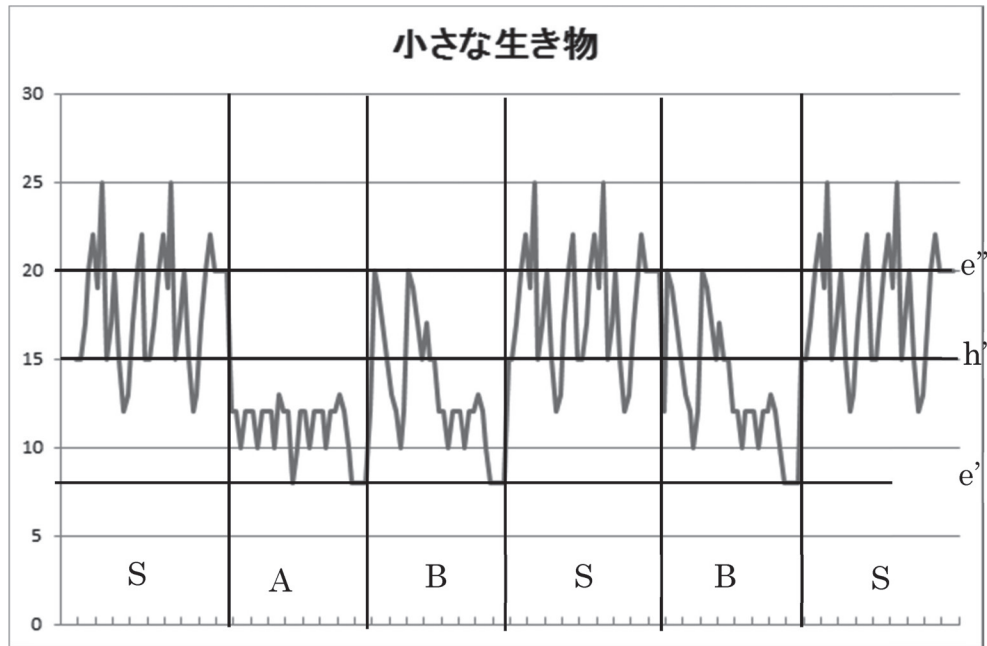


図 3

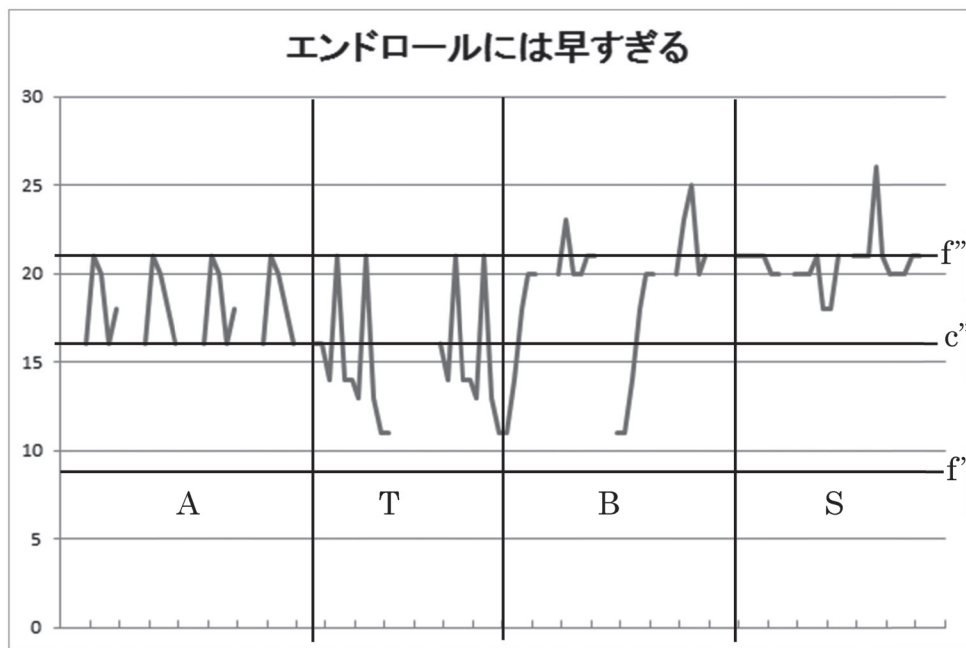


図 4

ニ長調、『小さな生き物』ではハ長調であり、基準音はほぼハ音～ホ音の範囲である。一方、基準音が属音である場合、『CYCLE HIT』で頻度が高い調はヘ長調、ト長調（、イ長調）、『小さな生き物』ではト長調とヘ長調であり、したがって基準音はほぼハ音～ホ音の範囲と見なすことができる。つまり①と②は、補完的な関係をもつのである。

③は、『小さな生き物』では7曲ある。《小さな生き物》、《りありてい》、《ランプ》、《オパビニア》、《さらさら》、《エンドロールには早すぎる》、《遠吠えシャッフル》である。

アルバムのタイトルになってもいるホ長調の《小さな生き物》を例にあげよう（図3）。A部分の音域は1点ホ音～1点イ音、主音と属音の間という狭い範囲であるが、B部分は1点ホ音～2点

ホ音、主音と1オクターヴ上の主音の間であって、属音を基準として上下に広がる運動をしている。さらにS部分は、1点嬰ト音～2点イ音の範囲であり、主音である2点ホ音の上下に広がっている。

もう1曲例を挙げる(図4)。《エンドロールには早すぎる》はヘ長調であり、A部分が属音～その上の主音の間、Tが属音の上下、B部分が属音とその上の主音をまたぐ広い音域、S部分は上の主音の上下である。

## 2.7. 旋律の音域の問題

スピッツというバンドの魅力や個性を考える場合、2点イ音(あるいはそれより高い音)がカギになっているということは、『CYCLE HIT』を論じたときに指摘した。これは、アルバム『小さな生き物』でも変わらない。全12曲中6曲は最高音が2点イ音であり、4曲が2点変口音～2点ハ音を最高音としている。

しかし、こうした2点イ音より高い音の使用は、『小さな生き物』ではやや控えめであると言わざるを得ない。『CYCLE HIT』では、2点イ音より高い音が短時間に頻出したり、持続的な比較的長い音として現れる楽曲が少なくない。《夏の魔物》、《空も飛べるはず》、《青い車》、《ロビンソン》、《涙がキラリ☆》、《渚》、《運命の人》、《夢追い虫》、《スターゲイザー》、《正夢》、《春の歌》が該当する。《楓》は変イ長調だから、2点イ音は出てこないが、2点変イ音が長い音として現れ、これより高い音も現れるので、同様に該当すると見てよい。

ところが、『小さな生き物』の中でこれに相当すると考えられる楽曲は、《遠吠えシャッフル》、《スワン》、《僕はきっと旅に出る》の3曲だけである。他の楽曲では、2点イ音やそれより高い音域が、表現上のキーポイントになったり、個性や魅力になったりすることはあっても、それに到達したのち比較的早く下降線をたどってしまい、短時間に何度も繰り返されたり、長い持続音になったりすることはあまり見られない。

『小さな生き物』収録曲の最低音として、1点のホ音、嬰ヘ音、ト音の頻度が高いことは、『CYCLE HIT』と変わらない。一方、『CYCLE HIT』中の最高音は3点ニ音、最低音は点なし口音で、声域の広がりには2オクターヴと短3度だったが、アルバム『小さな生き物』は最高音が2点ハ音、最低音が1点ニ音、声域の広がりには1オクターヴと短7度である。

使用音域の狭さ、つまり形式上の区分のうち、どの部分で音域が1オクターヴを下回るかという

ことについては、Aが9曲、Bが5曲(ただしこれはABS型に限って算入)、Sが2曲(AB型でBがSのものを含む)、EまたはTが3曲である。

全体的に見て、音域と楽曲区分の間に関連性が高いが、『未来コオロギ』と『野生のポルカ』はこの関連性があまり顕著とは言えない。特に第1曲の『未来コオロギ』は、シンコーミュージック・エンタテイメントのバンドスコアの編者が「アルバムのオープニングを飾る、スピッツならではの抒情的ポップ・ナンバー」(バンドスコア, 2013, p.2)と評価しているにもかかわらず、何か輪郭の明確でない、印象のまとまらない感じをうけるのだが、それはこのためかもしれない。この『未来コオロギ』はいわばアルバムの導入曲であって、つづく第2曲にアルバムのタイトル曲がくるという並べ方は決して珍しいとは言えず、例えば荒井由美の『14番目の月』を思い起こさせる。この荒井のアルバム中のタイトル曲を2002年にスピッツがカバーしていることを考えると、この連想もあながち的外れとばかりは言えないかもしれない。もう一つ付け加えれば、第2曲と最終曲は構成感のしっかりした楽曲であり、アルバム『小さな生き物』のフラッグ・ピースと言えるのではないかと考える。

## 2.8. 歌詞

烏賀陽弘道は『Jポップの心象風景』の中で、草野正宗の「詞に頻出するふたつの特徴」を指摘している。すなわち「(一)「まるいもの」に託したメタファー」と「(二)「死」を暗示する表現」である(烏賀陽, 2005, p.138)。これらの特徴をめぐる烏賀陽の論述については言及しない。本稿の目的とは少しずれるからである。しかし最後に、アルバム『小さな生き物』の各曲において、この「ふたつの特徴」に関連した歌詞についてほんの少しだけ触れておくことにする。

まず「まるいもの」に託したメタファーに該当するものである。《未来コオロギ》:「丸や四角や名もない形も」。《小さな生き物》:「小さな星のすみっこ」。《ランプ》:「ランプ」,「虹が出そうなビル谷を見上げているよ」。《オパビニア》:「穴あきの服で風を感じた日々が」。《エンドロールには早すぎる》:「エンドロール」,「夕日の赤さに溶けながら」。《遠吠えシャッフル》:「逆さにしたり裏がえしたり」,「ムダな抵抗も穴を穿つはず」。《スワン》:「星空を見るたびに思い出す」,「指で穴あけたら」。《僕はきっと旅に出る》:「星の無い空見上げてあふれそうな星を描く」。

ランプや虹は完全な「まる」ではないが、「まる」に近いイメージに属すると言えよう。「穴」にはいろいろな形があり得るかもしれないが、もっとも一般的なのは「まる」だろう。「エンドロール」はまるくないが、「ロール」は円運動を連想させる。「逆さにする」「裏返しにする」という行為には、円運動が関連する。

次に「死」を暗示する表現に該当するものである。《未来コオロギ》:「描いてた パラレルな国へ／白い河を 飛び越えて」。《オパビニア》:「誇り高さあの オパビニアの子孫／僕は生きていた 妄想から覚めてここにいた」。《さらさら》:「だから眠りにつくまで そばにいて欲しいだけさ／見えない時は自由でいい／まだ続くと信じてる 朝が来るって信じてる／悲しみは忘れないまま」。《野生のポルカ》:「生まれ変わる前のステージで」,「さよなら僕の抜け殻達よ」。《スワン》:「森が深すぎて 時々不安になる／指で穴あけたら そこにはまだ世界があるかな?」。《僕はきっと旅に出る》:「僕はきっと旅に出る 今はまだ難しいけど／初夏の虫のように 刹那の命はずませ／小さな雲のすき間に ひとつだけ星が光る／たぶんそれは叶うよ 願ひ続けてれば／愚かだろうか? 想像じゃなくなるそんな時まで」。

「パラレルな国」は死の国とは限らず、広く異次元空間ということかもしれないが、その後の「白い河」というのが暗示的である。「河」は洋の東西を問わず、この世とあの世とを分かち。《オパビニア》,《さらさら》,《野生のポルカ》のそれぞれ引用箇所は、輪廻転生のイメージに近いと見ることもできる。《スワン》と《僕はきっと旅に出る》の引用箇所は、死のイメージにきわめて近いと思われる。

このように検討してみると、烏賀陽の指摘した特徴がアルバム『小さな生き物』にも共通していることがわかる。しかし、実はこれらの引用は、『小さな生き物』の歌詞全体からみると、かなり限定的な部分にすぎない。

こうしたことがどのような意味をもつのかについては、本稿の範囲を越えるので、別の機会にしたい。

### 3. 結び

以上をまとめると、以下ようになる。

形式に関しては、『小さな生き物』中の研究対象曲12のうち7曲がABS型またはその変形であり、4曲がAB型またはその変形、1曲が三部形式である。『CYCLE HIT』では30曲中17

曲がABS型、13曲がAB型だった。AB型の占める割合でみると、『小さい生き物』は33.3%、『CYCLE HIT』は43.3%である。また『小さな生き物』において、ABS型の曲数はAB型のほぼ2倍になる。これだけで決定的な結論を出すことはできないが、ABS型への傾きが強くなっていることは指摘できる。

調の選択に関しては、シャープ系の調への偏向が強まっているように思われる。これには、ギター・ワークの好みの問題とヴォーカルである草野の声域の問題が絡んでいるかもしれない。また現段階ではあくまでも推測の域を出ないが、例えばニ長調かホ長調を選択する可能性がある場合はホ長調を採るといような、調選択の集約化が起こっている可能性も感じられる。

はっきりとわかる転調は行われない。しかし、長調において平行短調への傾斜がたびたび見られ、旋律の最後の終止がかろうじて長調の主音に到達していても、楽曲の大部分がその平行短調と見なされる場合もある。短調の借用や傾斜、一時的な迂回が起こっても、ドミナントは和声短音階のVにはならない。《りありてい》は、一見ホ長調に見えるが、実際にはそうでない可能性が高い。

旋律音の運動が主音の上下であるか属音の上下であるかということ、調選択と関連づけて考えてみると、主音であろうと属音であろうと、旋律音の運動の基準線が1点口音～2点ホ音の範囲にくるように、調を選択している可能性が浮上してくる。こうした現象を、本文中の節では「補完的な関係」と述べた。しかし、これを証明するには、より多い楽曲の検討が必要である。

形式の区分ごとに旋律音の運動の基準が変わる曲づくりは、『CYCLE HIT』では対象曲の20%であったが、『小さな生き物』では75%になった。

2点イ音とその周辺の高い音域がスピッツの音楽表現において重要な役割を果たしていることは、『CYCLE HIT』においても『小さな生き物』においても明らかである。しかし、後者においては高音域の使用がいくぶん控えめになりつつあるのも確かである。一方、ヴォーカルの音域は、『CYCLE HIT』と『小さな生き物』を比較すると、後者では前者より2分の1オクターヴ狭くなっている。

このように検討を加えていってみると、一般の聴衆にとっては変わらずにスピッツとイメージされる音楽にも、様々な様式上の相違が見られうるということがわかる。これを端緒として、より包括的なスピッツ論に発展させることができるだろう。し

かし、そのためにはスピッツの創作全体へと対象を広げることと、その過程を通じて、様々な様式上の特徴において本質的なものと表面的なものを識別することが必要になる。そうした研究は、今後の課題としたい。

#### 引用・参考文献

大角欣也 (2000) 「宇多田ヒカルの《Automatic》」  
『宇多田ヒカル“Automatic”の学際・総合・研究 90年代売れ筋日本語ポップスの総決算』(JASPM ワーキング・ペーパー・シリーズ No.8) 日本ポピュラー音楽学会: 6-15  
鳥賀陽弘道 (2005) 『J ポップの心象風景』(文春

新書) 文芸春秋社

長野俊樹 (2013) 「J-POP バンド“スピッツ”の旋律構成に関する研究」(福岡教育大学紀要, 第62号, 第5分冊) 福岡教育大学: 1-8

#### 参考楽譜

『バンドスコア スピッツ「小さな生き物」』(2013)  
シンコーミュージック・エンタテイメント

#### 参考 CD

『小さな生き物』(2013) ユニバーサルミュージック